岡山県埋蔵文化財発掘調査報告50

高　坪　古　墳

１９８２年３月

岡山県教育委員会
文　化　課

序

瀬戸内海に面した岡山県南部には，高梁川，旭川，吉井川の三大河川によって形成された沖積平野が広がっています。こうした肥沃な沖積地を中心に古代吉備国として栄えた岡山県には多くの遺跡が分布しており，文化財の保護保存については特に慎重に対処してまいりました。しかしながら，近年県土開発事業の増加に伴い，遺跡との競合関係を来すことが多く，その調整には苦慮しているところであります。

高坪古墳の発掘調査は県道の改良工事に伴うものでありますが，現状保存が困難なことからやむなく記録保存の措置を行ったものであります。

発掘調査の結果，古墳は6世紀後半に築造されたもので，横穴式石室を内部主体とする円墳であることが判明しました。

本報告書はこうした調査の成果をまとめたものであり，文化財の保護保存に活用され，また古墳研究の資料として役立てば幸いに存じます。

最後になりましたが，調査にあたって御協力を賜りました岡山地方振興局等関係各位，並びに厳寒の折りにもかかわらず発掘作業に従事くださいました地元の方々に対し，厚くお礼申しあげます。

昭和57年3月

岡山県教育委員会

教育長　佐藤　章一

例　　言

1．本書は岡山県教育委員会が県道清音真金線改良工事に伴い発掘調査を実施した「高坪古墳」の報告である。

2．古墳は岡山市の新庄下および津寺の境界に所在するが，小字が高坪であることから「高坪古墳」と称した。

3．発掘調査は平井　勝が担当し，昭和56年（1981年）11月12日から昭和57年（1982年）1月29日まで実施した。

4．出土遺物の整理は文化課分室（岡山市西古松）にて行い，報告書刊行後も同所に保管されている。

5．本書の執筆，編集は平井　勝が行った。

6．本書作成の過程で下記の方々の協力を得た。記して感謝の意を表わします。
光永真一，平井典子，亀田菜穂子，清水恵子，山本悦世(岡山大学)

7．凡　　例

a，第1図の地形図は国土地理院の25,000分の1の地図（総社東部・倉敷）を複製したものである。

b，レベルは海抜高度を示す。

c，方位は第1図以外すべて磁北を示す。

目　　次

序

例　言

第１章　調査の経緯 …… 1

第Ⅱ章　古墳の位置と歴史的景観 …… 2

　Ⅰ　位　置 …… 2

　Ⅱ　歴史的景観 …… 2

第Ⅲ章　調査の経過 …… 4

第Ⅳ章　古墳の調査 …… 7

　Ⅰ　墳　丘 …… 7

　Ⅱ　周　溝 …… 7

　Ⅲ　横穴式石室 …… 7

　Ⅳ　副葬品の出土状態 …… 11

　Ⅴ　副葬品 …… 12

第Ⅴ章　結　語 …… 18

図　目　次

第１図　高坪古墳の位置と周辺の遺跡 …… 3
第２図　調査前の墳丘測量図 …… 5
第３図　調査後の墳丘測量図 …… 8
第４図　墳丘縦横断面図 …… 9
第５図　石室実測図 …… 10
第６図　石室断面図 …… 11
第７図　石室平面プラン …… 11
第８図　副葬品分布図 …… 12
第９図　須　恵　器　(1) …… 13
第10図　須　恵　器　(2) …… 14
第11図　須　恵　器　(3) …… 15
第12図　鉄　製　品 …… 15
第13図　装　飾　品 …… 16

表　目　次

表１　高坪古墳計測表 …… 11

図　版　目　次

図版１　１　古墳の遠景（南東から）

　　２　調査前の古墳（南から）

図版２　１　調 査 風 景

　　２　調 査 風 景

図版３　１　石室内副葬品出土状態（南から）

　　２　敷石部の副葬品出土状態（西から）

図版４　１　副葬品取り上げ後の石室（南から）

　　２　敷石下の排水溝状の遺構（南から）

図版５　１　閉塞石の状態（南から）

　　２　玄室から入口の見通し（北から）

図版６　　鉄滓の出土状態（南から）

図版７　１　墓道（北から）

　　２　墓道と石室（南から）

図版８　１　石室の掘方（北から）

　　２　Ｎトレンチの土層（南西から）

図版９　１　北側の周溝（北から）

　　２　西側の周溝（南から）

図版10　１　古墳全景（南から）

　　２　古墳全景（北から）

図版11　　須　恵　器　(1)

図版12　　須　恵　器　(2)

図版13　１　須　恵　器　(3)

　　２　鉄　製　品

図版14　１　装　飾　品

　　２　鉄　　滓

第Ⅰ章　調査の経緯

岡山市の西部，足守川下流西側一帯には造山古墳をはじめ，多くの古墳や各種の遺跡が認められる。これらの一部は吉備路風土記の丘として整備され，一般に公開されている。またこの地にはほぼ東西に旧山陽道が通っており，現在その道は多少改良され，生活道路として利用されている。ところが車の著しい増加に伴ない，岡山市への近道として利用者が多くなり，車1台が通れる幅では危険であることから，地域住民の間でバイパスの要望が高まっていた。こうしたことから岡山県では西の清音村から順次改良工事を進め，昭和56年には高坪古墳の所在する丘陵の西側まで工事が完了した。

昭和56年6月に岡山地方振興局工務第二課から文化課へ「県道清音真金線改良工事を新庄下から東へ進めるので，遺跡が所在するかどうか知らせてほしい」との相談があった。さっそく河本と平井が現地を踏査したが，立木が多いことから十分に行うことができなかった。しかし尾根上には平担部があり，近くには古墳も所在することから一応トレンチによる確認調査が必要であるとの結論を伝えた。そして昭和56年9月3日に丘陵上の確認調査を実施した結果，古墳が一基確認されたので，その旨を岡山地方振興局へ連絡するとともに文化財保護法に基づく手続きを指示した。

昭和56年9月14日付けで岡山県知事長野士郎より文化財保護法第57条の3に基づく協議書が提出され，これを受けて協議を重ねた。その結果丘陵上の古墳については岡山県教育委員会が発掘調査を実施することとなった。また合せて，丘陵東側の山裾（黒住地区）の確認調査と，新矢部橋橋脚部と道路取付部の立会も行うこととなった。

調査は昭和56年（1981年）11月12日から昭和57年（1982年）1月29日まで実施した。

調査体制

岡山県教育庁文化課	課　長	早田　憲治	課長代理	吉光　一修
	埋蔵文化財係長	河本　清	主　任	田中　建二
	文化財保護主査	松本　和男	文化財保護主査	柳瀬　昭彦
	文化財保護主事	平井　勝	文化財保護主事	江見　正己

調査員　平井　勝

作業員　萩野　正夫，多田　義雄，古谷　中雄，古谷　正子，古谷美津古，多田　昌代

なお発掘調査にあたっては渡辺　光，浅倉秀昭，岡本寛久の援助を得た。記して感謝の意を表します。

第Ⅱ章　古墳の位置と歴史的景観

Ⅰ　位　　置

岡山県南部は吉井川，旭川，高梁川の沖積平野が広がり，南は瀬戸内海に面し，北は吉備高原により画される。この三大河川の一つ，旭川は岡山県のほぼ中央を北から南へ流れて瀬戸内海へ注ぐが，下流の沖積地上には岡山市の中心街が位置する。

古墳はこの岡山市の西端を北から南へ流れる足守川の西側丘陵上に位置し，行政区画は岡山市新庄下であるが，稜線上に境界があり，同市津寺に係る可能性もある。

古墳の所在する丘陵は南の日差山から北に派生したもので，北端は足守川に接している。日差山と古墳の所在する丘陵の間には旧山陽道（現県道清音真金線）がほぼ東西に通っている。この道の峠北側が一坦高くなり，ここより北へ緩やかに低くなってゆき，さらにまた高くなり最高所（86m）に至る。古墳はその低くなりきったやや平坦部に所在する。

ここからの視界は西側では狭いが，東側は眺望が良く，足守川の東に広がる沖積地が眼下に，さらに遠くには吉備中山まで開けている。このことと，古墳が尾根稜線から東にわざわざ偏して築造されていることとは無関係とは思われない。

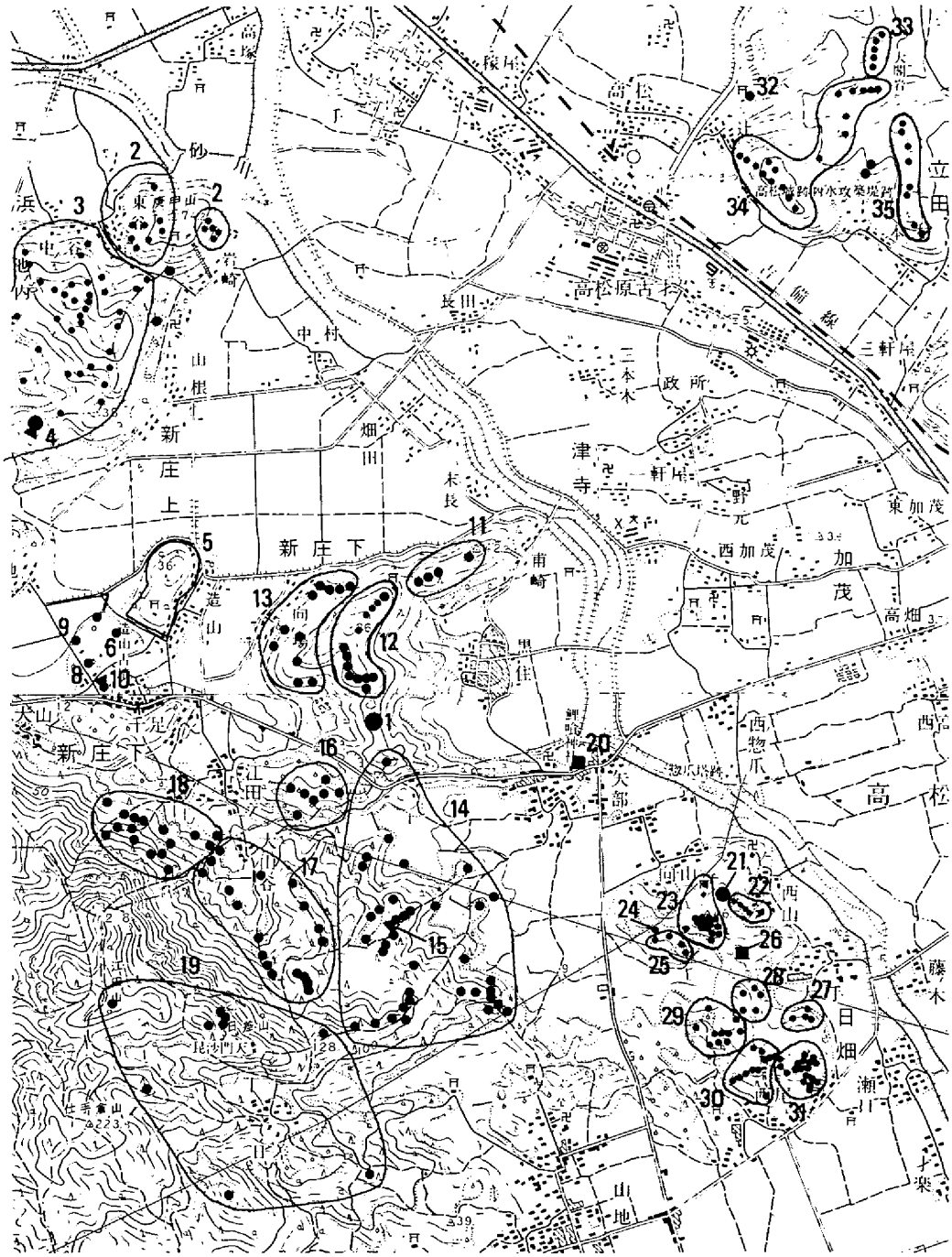
Ⅱ　歴史的景観

古墳の所在する丘陵の西側には全長約350mの造山古墳があり，その南側には千足古墳をはじめとする陪塚が認められる。南側の日差山北斜面から東斜面にかけては後期古墳が多数分布している。しかしこの中には古墳時代前期と考えられる前方後円墳(15)も所在する。

南東の倉敷市矢部から山地の一帯は矢部廃寺をはじめ，縄文時代から中世に至る遺跡が広がっている。この東側，王墓山には弥生時代終末から，古墳時代初頭にかけての墳墓群である女男岩遺跡，辻山田遺跡が所在する他，後期古墳も多数分布している。王墓山の北端に近い所には弥生時代後期後半の楯築墳丘墓がある。また矢部の鯉喰神社地も墳丘墓であり，甫崎の丘陵上にも墳墓群が所在していることから，古墳出現前後の研究には重要な地域である。

集落は足守川東岸の微高地上に形成されており，特に弥生時代後期後半から古墳時代初頭にかけての大規模な集落が想定される。また岡山県では数少ない沖積地の寺院址，惣爪廃寺も所在する。

最後に古代の行政区画を示せば備中国都宇郡に属し，郷は大略驛家に相当すると考えられる。



1．高坪古墳
2．庚申山古墳群
3．雲上山古墳群
4．小造山古墳
5．造山古墳
6．造山古墳附1号墳
7．造山古墳附2号墳
8．造山古墳附3号墳
9．造山古墳附4号墳
10．千足古墳
11．甫崎古墳群
12．黒住古墳群
13．向場古墳群
14．矢部古墳群
15．矢部古墳群17号（ひょうたん塚）
16．江田古墳群
17．矢部大山谷古墳群
18．江田山麓古墳群
19．日差山古墳群
20．鯉喰神社遺跡
21．楯築神社遺跡
22．～31．王墓山古墳群
32．御崎神社古墳
33．堂山裏古墳群
34．観音山古墳群
35．勝負谷古墳群

第1図　高坪古墳の位置と周辺の遺跡

第Ⅲ章　調査の経過

調査は経緯で述べたように古墳だけではなく，道路予定地に係る黒住地区の確認調査と新矢部橋橋脚部と取付部の立会も合せて行なった。

調査は工事工程との関係で，まず黒住地区の確認調査から開始した。トレンチは幅１ｍとし，斜面の傾斜方向と平行に11本設定した。トレンチ番号は低い方から1T……11Tと標示し，すべて地山（花崗岩風化土）まで掘り下げた。その結果，古墳時代後期から奈良時代にいたる遺構遺物が確認された。

調査は引続き丘陵上の高坪古墳に移った。古墳はまず周辺の立木伐採を行ない，現状の写真撮影と墳丘測量を行なった。墳丘上には表土剝ぎに先立ち基準杭を設定した。現状で石室の主軸と考えられる位置にＳ―Ｎ線を設け，ほぼ石室の中心から東西に90°振ってＥ―Ｗ線とした。この基準線上に基準杭を打ち，概略東西南北を示すことからE1，E2……と標示した。

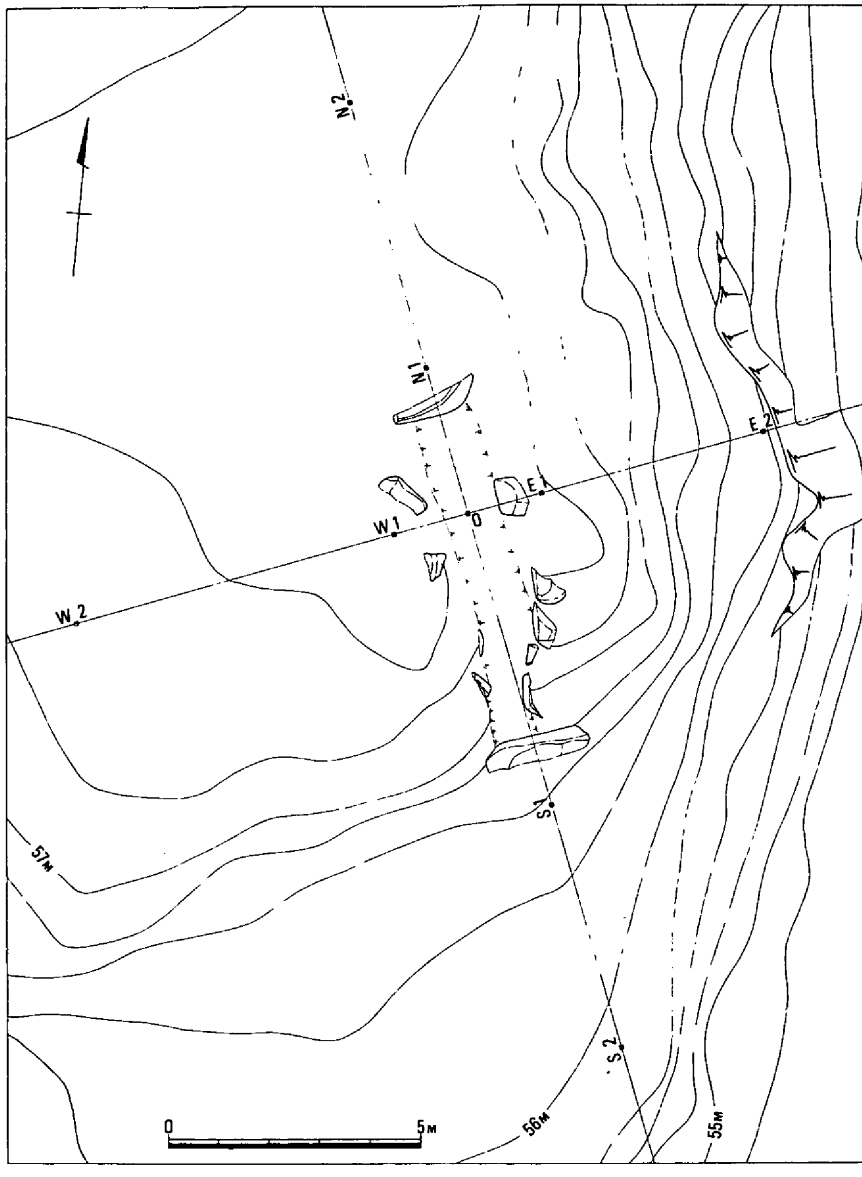
発掘はまず墳丘の概略を把握するため，基準線に接してＮトレンチ，Ｅトレンチ，Ｗトレンチを設定した。このうちＮとＷトレンチで幅約４ｍ近い周溝が検出されたため，Ｎトレンチから西へ調査区を拡大して周溝の検出に勉めた。同時に石室内流入土の排出作業も行い，床面に近い位置で止めておいた。

古墳の調査中２回にわたり新矢部橋の立会を行なった。第２橋脚部は４×７ｍの範囲内にパイルが12本打込んであり，平面的な遺構検出作業はできなかったが，土層断面の観察と遺物の採集を行なった。続いて第３橋脚部も同じ条件で行い，多量の遺物を採集した。

橋脚部の立会終了後再び古墳の調査にかかり，周溝検出作業を進めた。

途中また新矢部橋の取付部の立会を行い，弥生時代終末から古墳時代初頭の遺物を多量に採集した。

新矢部橋の立会がすべて終了したので，古墳は石室内の調査に移った。石室内は奥壁に接して床面に板石が敷いてあり，その上に棺台状の石が散乱していた関係で検出には時間がかかった。遺物出土状態の写真と遺物分布図作成後，遺物の取り上げと敷石の除去を行い地山を検出した。また同時にＳ―Ｗ間の表土を剝ぎ，周溝と墳丘の検出を進めた。その結果径約16ｍの円墳であることが判明した。残る石室は羨導部が西へ曲がっているため主軸線を修正し，石室の実測を行なった。そして最後に調査後の墳丘測量を行ないすべての調査を終了した。なお調査の実質日数は51日である。



第２図　調査前の墳丘測量図

日誌抄

昭和56年（1981年）11月12日～13日，黒住地区の確認調査。3と，5から9トレンチで古墳時代から奈良時代の遺構遺物が認められた。注目されたのは1辺40cm前後の方形掘方をもつ建物であるが，トレンチのため詳細は明らかにできなかった。

17日　古墳の調査開始。機材の運搬と立木の伐採を行う。

18日　立木伐採完了。

19日　平板で墳丘測量を行う。基準線と，それに接してWとNトレンチを設定した。

20日　Nトレンチで幅約4mの周溝を確認した。

24日　Eトレンチを設定し掘り下げを行う。

25日～30日　トレンチの掘り下げと石室内流入土の除去作業を行う。

12月1日～3日　新矢部橋第2橋脚部の立会。現地表から1.6mほどで包含層となる。

4日～5日　新矢部橋第3橋脚部の立会。現地表から1.7mで包含層に達する。

10日～14日　Nトレンチから西へ拡張して周溝の掘り下げを行う。Nトレンチ断面実測。

15日　石室内掘り下げを行う。Wトレンチの周溝内から須恵器の大甕破片が出土。

16日　W.Eトレンチ掘り下げ完了。石室内掘り下げも並行して行う。

17日　石室内は黄褐色土下が暗褐色粘質土となり，その中より須恵器が一部露呈。

18日～22日　石室内の発掘は中止し，Nトレンチ西側拡張区での周溝検出を行う。

23日～25日　新矢部橋取付部の立会を行う。古墳時代初期の小規模貝塚も認められた。

昭和57年（1982年）1月6日～7日　石室内の掘り下げと，Nトレンチ西拡張区の周溝検出を行う。石室内では鉄釘片が点在している。

8日～11日　石室内遺物検出作業，W－S線間の周溝掘り下げを行う。

12日　石室内遺物検出完了。S－W線間周溝内より大甕片が多量に出土。

13日　石室内遺物分布図作成後遺物取り上げを行う。

14日　石室内敷石検出完了。石室南側まで周溝がめぐっているが，極端に狭くなっている。

15日　S－E線間の表土剝ぎ。

18日　石室入口南西周溝内で須恵器大甕片が出土。南東でも追葬の際に外に掻き出した状態で須恵器が出土。

19日　石室内敷石平面図作成。石室入口前面から墓道が溝状に掘られている。

20日　墓道掘り下げ。石室全景写真。

21日　石室に実測用の割付を行う。閉塞石平面図及び石室西側壁の実測。

22日　周溝を越えて南東へ下る墓道を検出。石室平面図と奥壁見通し図作成。

25日　敷石と閉塞石を取り去り石室の清掃を行う。

26日　石室東側壁と縦横断面図作成

27日　全景写真を南からと北から撮影する。

28日　調査後の墳丘測量を行う。

29日　機材を運搬しすべての調査を完了した。

第Ⅳ章　古墳の調査

Ⅰ　墳　　丘

古墳の位置する所は丘陵の鞍部で，東西は急斜面となる。稜線上はやや平坦となり，その東に偏して古墳は築造されている。しかし墳丘は全く認められず，僅かに露呈している側壁の一部から古墳であることが推定された。

調査は全面にわたって表土を除去し，墳丘の検出を行う予定ではあったが，周溝が大規模であったため一部未検出のまま調査を終了した。しかし古墳の概要を把握する上では支障はないものと考えられ，以下に判明したことを記すことにする。

墳丘は石室の天井石とともに削平されてはいるが，周溝の存在から平面プランは長円形を呈するものと判断される。東側墳端は急斜面であることから周溝は掘られておらず，盛土の状態からほぼ56m の等高線に想定され得る。こうして見ると墳丘規模は溝の中心間で計測すると南北16.5m，東西13m となる。

盛土の状態はN・E・Wの各トレンチで観察した。地山(花崗岩風化土)は周溝によって形が整えられ，その上に黄褐色土がほぼ一定の厚さで積まれてゆく。盛土中には暗褐色土層が一様に認められることから，この段階で意識的に積んだものと考えられる。また盛土はよく固められていた。

Ⅱ　周　　溝

周溝は石室主軸より西側で検出した。北側は東の斜面部に移行して消えるものと思われ，南では墓道と重なり南東側で消える。したがって東側の急斜面部にはめぐっておらず，西側の平坦部を大規模に掘削したものである。

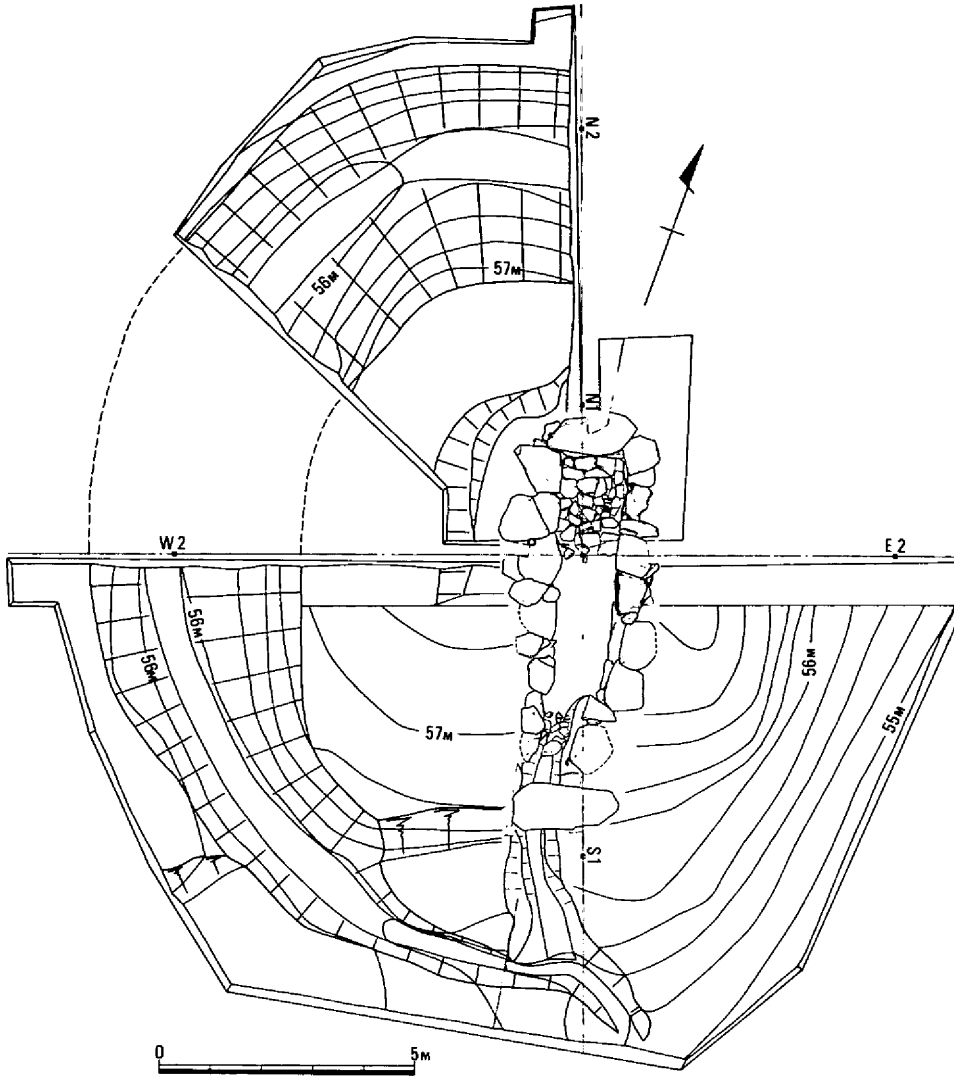
周溝はN線からW線間が最も深くて広く掘られており，幅4.2m，深さ1.8m を測る。W線より南はしだいに幅を狭め，石室入口前では，極端に狭くなり，壁の立上りも墳丘側は垂直に近くなる。

周溝内には墳丘上からの流入と考えられる堆積土と，墳丘外からの堆積土とが認められる。また一番底には黒褐色土が認められる。W線に近い所からは須恵器の大甕が破片となって出土し，その南側，W線とS線の中間あたりからも大甕が破片で出土した。

Ⅲ　横穴式石室

石室の掘方

石室は地山をコの字状に深く掘込み，その中に構築している。掘方は石室よりやや広めに掘



第３図　調査後の墳丘測量図

られており，床面はほぼ平坦である。壁の立上りは急傾で，側石との間隙は黄褐色土で埋めている。

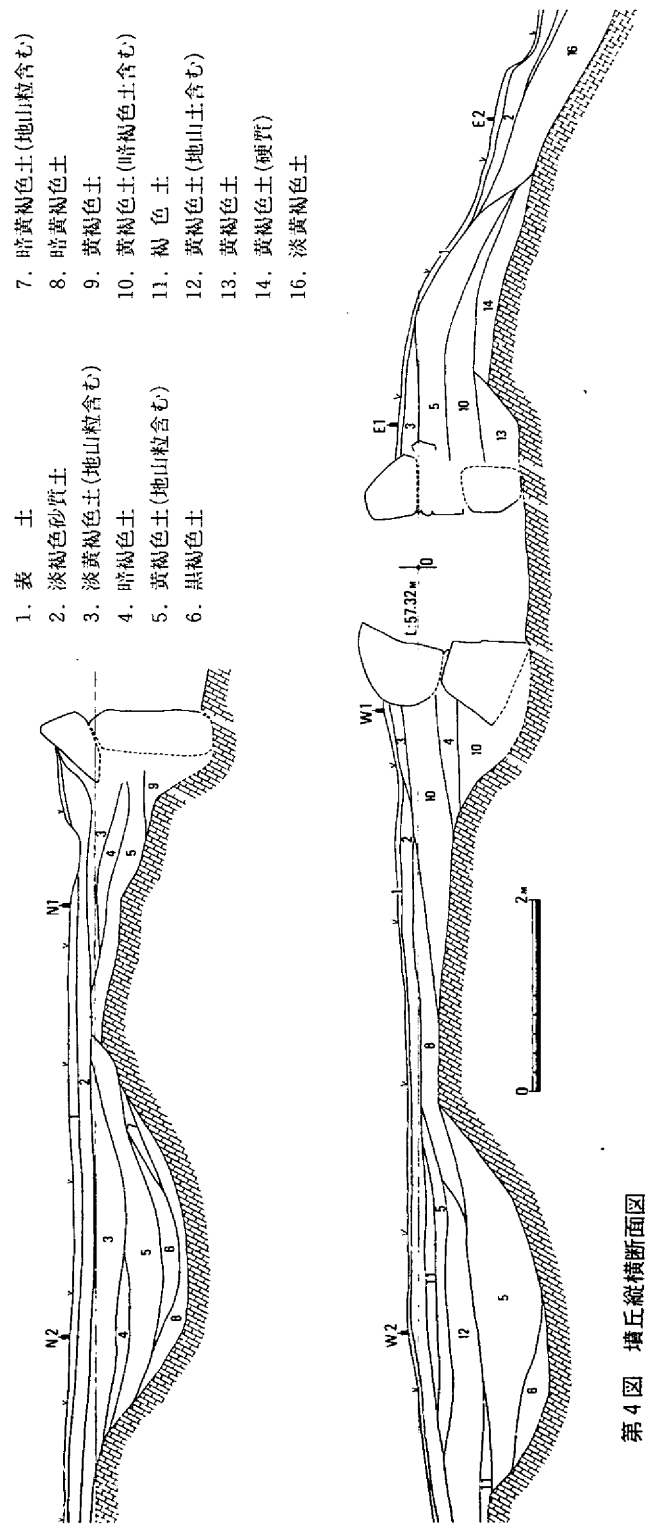
石室

横穴式石室は墳丘の中央部につくられ，主軸はほぼ南北方向となる。片袖の石室であるが，羨道部は簡略化され，申し訳程度に付設されているようである。

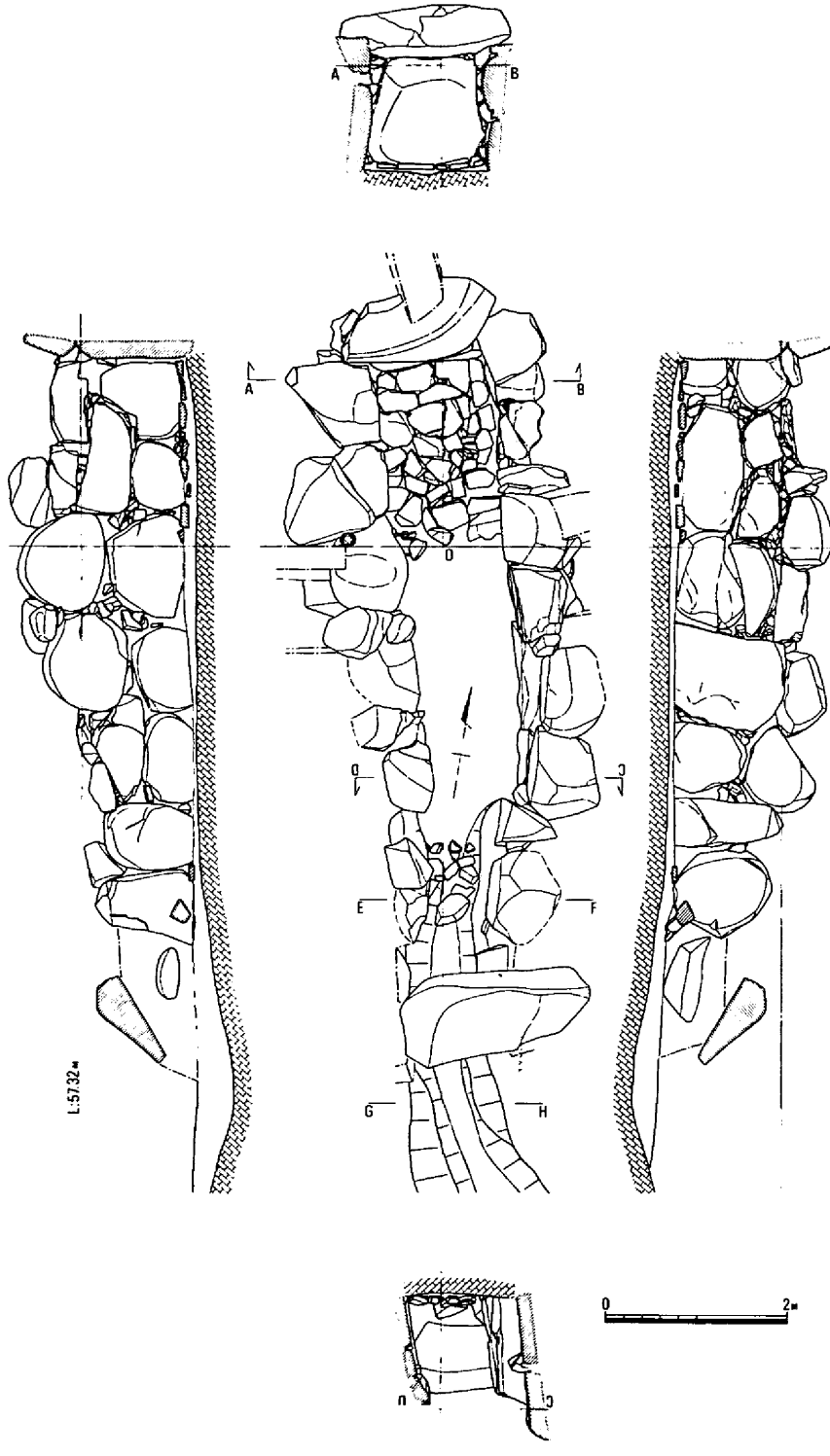
羨道部から外に向けて溝状の墓道が掘られており，その始まる位置に閉塞石が若干残存して

いる。墓道に転落している天井石は現地に残る唯一のもので，落下具合から，本来は羨道部の上にあったものと思われた。さて墓道は石室外ではやや東に曲り，周溝と重なって南東の谷へ下ってゆくものと考えられた。墓道は床面は狭いが平坦で，両方の立上りは緩やかである。全体的には南にむかって下がっており，埋葬用の通路でもあるが，排水溝の役割も担っていたと考えられる。

玄室は細長く，やや胴張りを呈する。平面プランで見ると西側の壁はほぼ一直線になっているのに対し，東壁は大きく弧を描いており，このため石室全体が弓形となる。側壁の石積みは当該期のものと変らず，最下段は石の一番広い面を利用し，その上からは横口，あるいは外口積みを行っている。石と石の間には小礫を入れて塞いでいる。残存状態は比較的良好で，本来の壁の高さに近いものと考えられる。奥壁は2枚を用い，下は広い面を内にして立て，その上は横口積みにしている。壁の立上りはほぼ垂直である



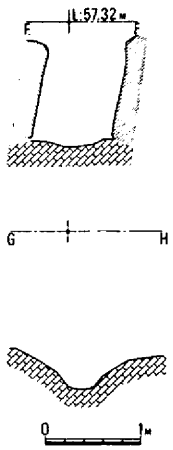
第4図　墳丘縦横断面図



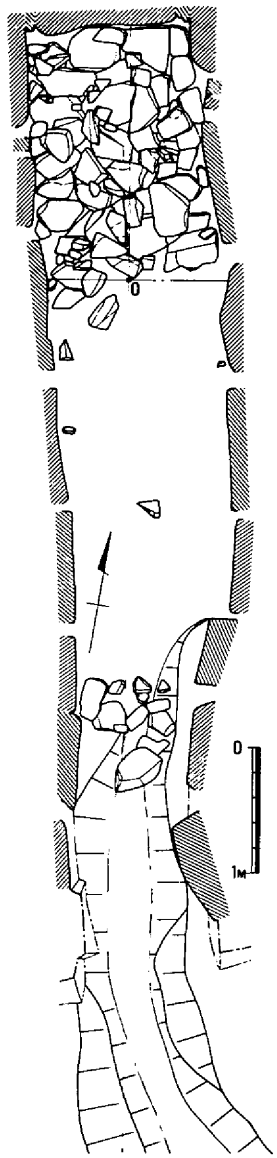
第5図　石室実測図

表1　高坪古墳計測表

		長さ	幅	高さ(深さ)
墳丘	東西	13 m		
	南北	16.5m		
周溝	北		4.2 m	1.8 m
	西		4.2 m	1.3 m
	南		0.6 m	0.2 m
石室	全長	7.1 m		
	玄室	4.7 m	A-B 1.28m	1.45m
			中央1.42m	1.8 m
			C-D 1.2 m	1.45m
	羨道		E-F 0.86m	1.1 m
墓道			G-H 1 m	
主軸方位		N－10°－W		



第6図　石室断面図



第7図　石室平面プラン

が，羨道部は全体的に東に傾いている。

床面は奥壁から2mまで板石を敷いており，それより前は地山が床面となる。敷石と敷石の間隙は暗灰色の粘土で埋められていた。この敷石の下には地山を穿った排水溝状のものが認められるが，外には出ず何の目的で掘られたものかは不明である。床面は玄室ではほぼ水平であるが，羨道部から少しずつ低くなってゆく。

Ⅳ　副葬品の出土状態

石室内の副葬品の多くは床面あるいは敷石上に破片となって散乱しているが，新しく攪乱された痕跡も認められず，追葬時に外に掻き出されたものが多いと考えられる。また玄室の袖に近い所は新しい攪乱が認められ，遺物は全く出土しなかった。

奥壁に近い敷石上には棺台と考えられる石が置かれているが，整然とは並んでいない。副葬品の多くはここから出土しており，鉄鏃・耳環・管玉・勾玉・須恵器等が点在していた。その配置には全く纒まりが認められない。ただ耳環については一対づつがあまり遠くない位置を保っている例もある。

木棺に使用された釘は細片まで含めてその位置と高さ，あるいは先端の方向を記録したが，何ら記するような出土状態は観察されなかった。

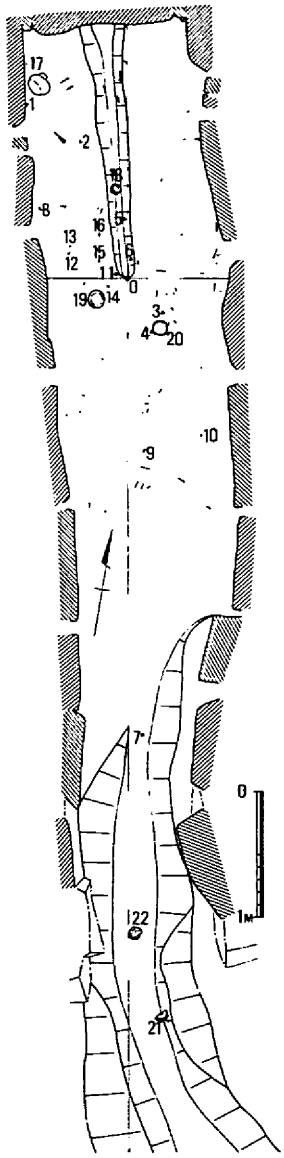
羨道部では閉塞石の間から耳環が一個出土し，その入口にあたる所には鉄滓が認められた。また墓道には須恵器の高杯片があった。また他の遺物の多くは墓道の端部にあたる東側墳端か

ら出土したものである。これは明らかに外に掻き出されたもので，石室内の破片と接合するものも認められた。

V 副 葬 品

須 恵 器 （第9図～11図）

図示し得たもののうち石室内からの出土は2，7，11，12の4点で，残りは8が墓道から，その他は周溝内及び墓道南東端から東斜面にかけての出土である。



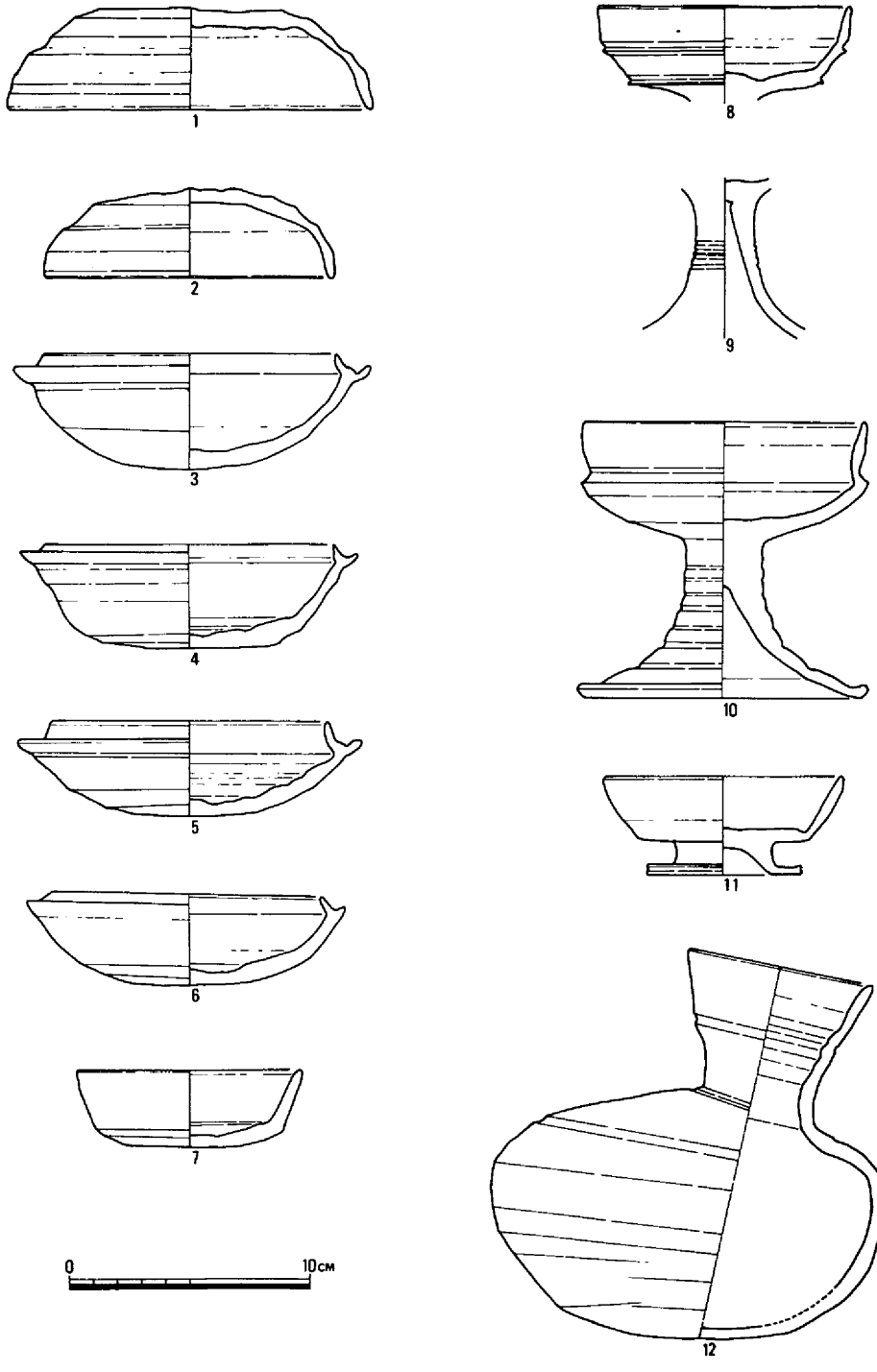
第8図 副葬品分布図

1から7は蓋と杯である。蓋は天井部と口縁部とをわける稜線が明瞭でなくなっている。天上部は1がヘラ削り，2はヘラ切り後未調整のままである。杯は受部のあるものと無いものとがある。受部を有するものは口径が11～12cmに収まり，総じて立上りは短く，内傾が著しい。底部は4がヘラ切り後未調整である以外はすべてヘラ削りである。7は他器種の蓋となる可能性もある。

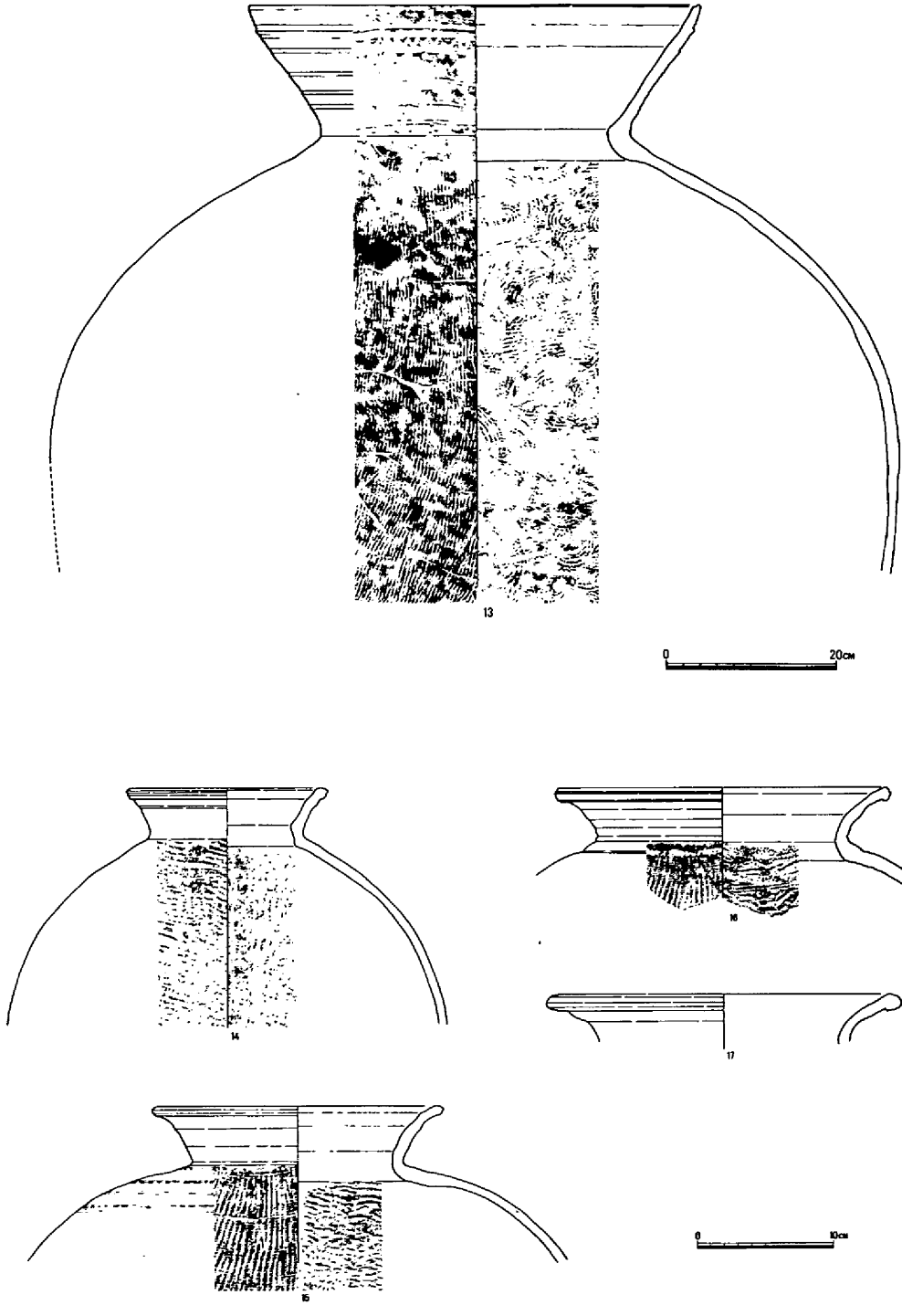
8～11は高杯で，小形の杯部に細長い脚部がつくもの（8～10）と，脚部より口径の大きい杯部に低い脚部が付くもの(11)とがある。

12は平瓶で，底部はヘラ削り，胴部上半はカキ目による調整を行っている。

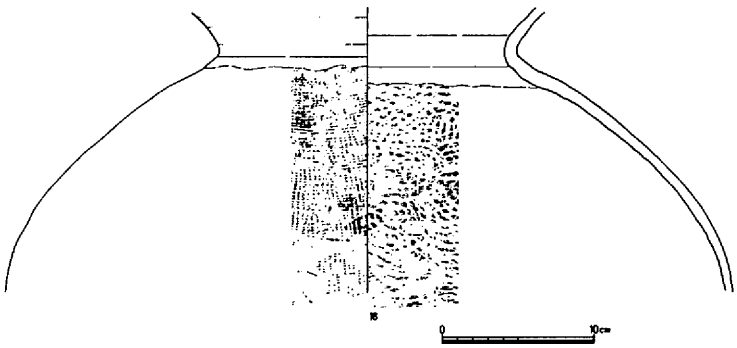
13～18は甕で，13が大形である以外はすべて中形である。13は西南側周溝内から出土したもので，胴部からくの字状に外反した長い口縁部外面には櫛描の波状文と円形刺突文が施される。14，16，17，18は墓道南東端および南東墳端から出土したものである。このうち14は一見壺的な外観を呈するものである。15は西側周溝内から出土したもので，胴部内面は青海波のタタキを部分的にナデ消している。



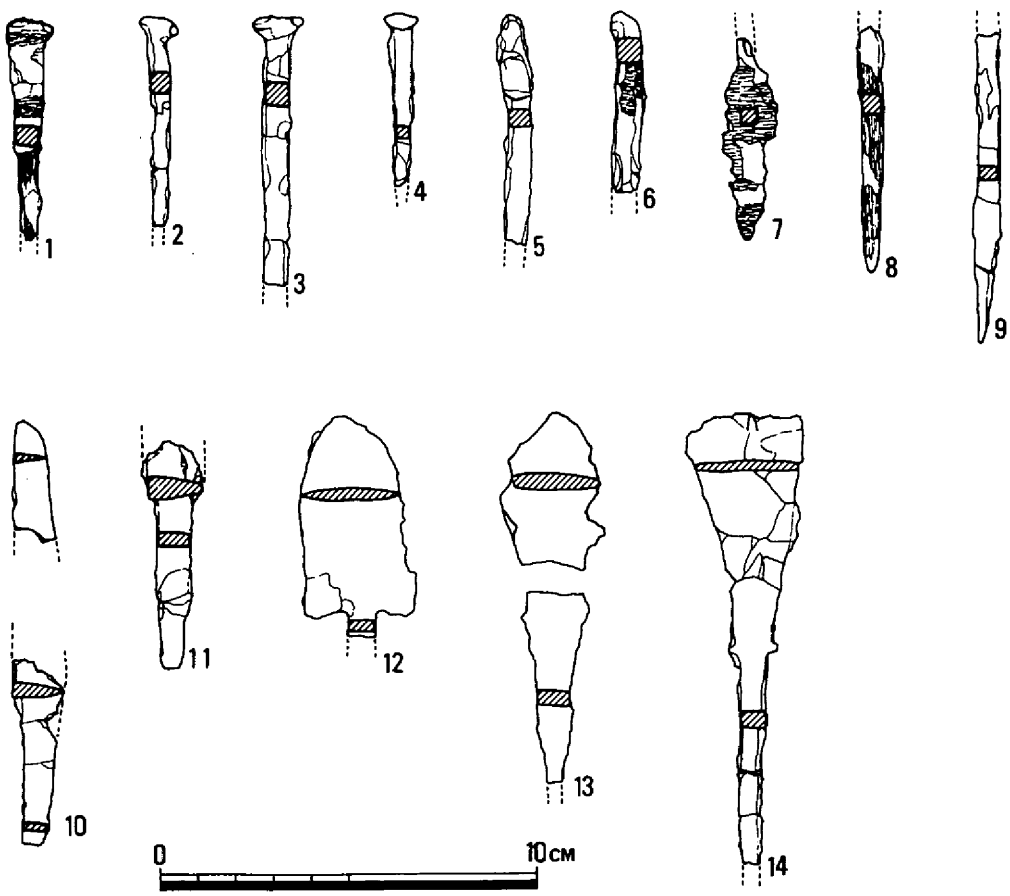
第9図　須 恵 器 (1)



第10図　須 恵 器(2)



第11図　須 恵 器 (3)



第12図　鉄 製 品

鉄 製 品　(第12図)

釘　(1～9)

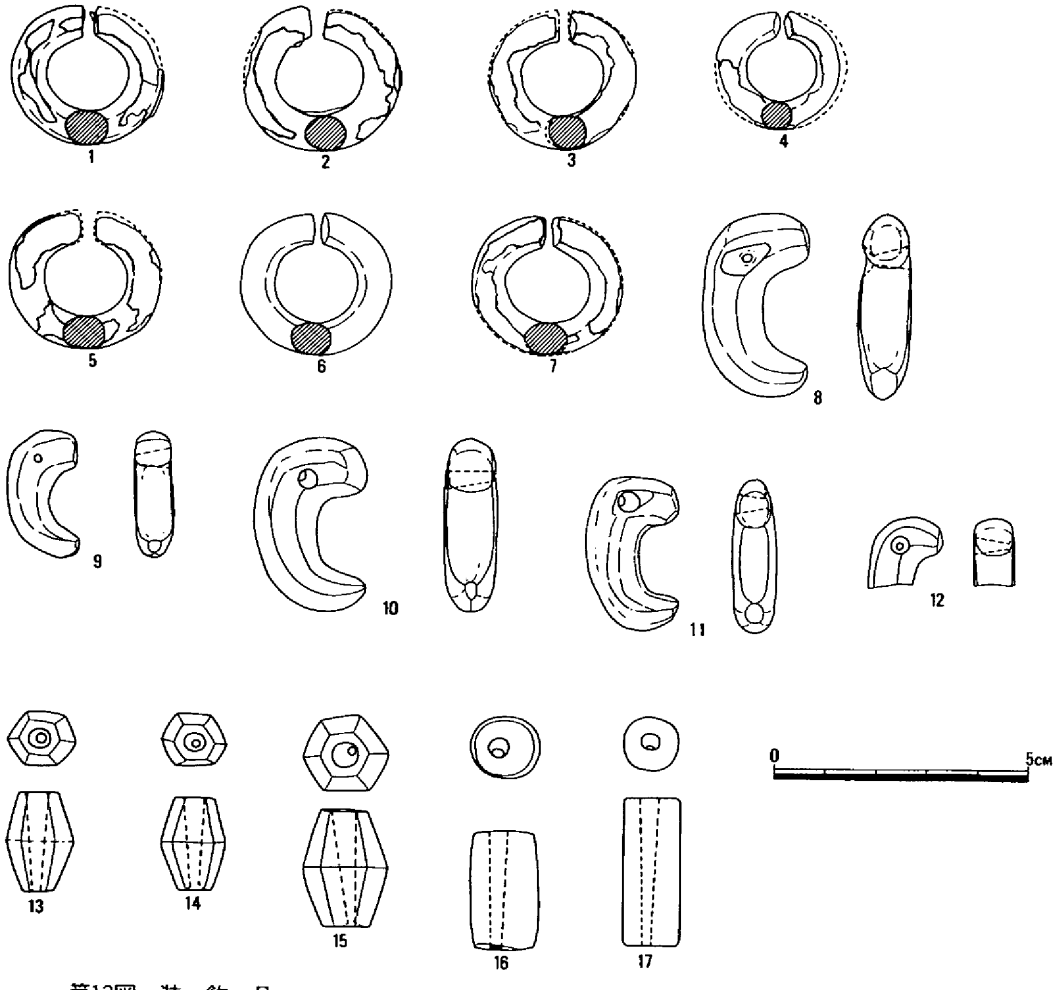
釘は石室内から60本近く出土しているが，そのほとんどは折れて小片となっていた。図示したものはその一部で，比較的形状の判明するものである。

1から4は頭部が残っているが，先端が欠損しており，全長は不明である。しかし2・4のごとく細いものは短かいものと考えられる。1は上部に横位の，下部には縦位の木目痕跡が認められる。

5から9は頭部および先端部が欠損しているものである。6と7には横位の，8には縦位の木目痕跡が残っている。釘の断面はいずれも方形を呈している。

刀子　(10，11)

形状の判明するものは2点であるが，その他に小破片でそれらしいものも認められる。



第13図　装　飾　品

10は同一個体ではないが，身は茎に近い部分が一番幅広く，先端にむかって幅を狭めてゆくものと推定される。関部は茎にむかって斜めに幅を減じる両関で，細い茎に移行する。

11は身の大部分を欠損している。身から茎へは斜めに幅を狭める両関である。

鏃　(12～14)

図示し得たものは3点であるが，これ以外にも鏃の一部と考えられる断片がある。

鏃はいずれも平根式の有茎である。12は両丸造り，13は両丸造りと考えられるが，明確でない。14は平造りである。

耳環　(第13図　1～7)

全部で7個出土したが，いずれも銹化が著しい。

1は銅地金張りであるが，金箔の剝離が著しい。形は径3cmのほぼ正円をなし，断面は円形を呈する。

2も銹化が著しく箔はすべて剝離している。径3cmのほぼ正円を呈し,断面はやや隋円形となる。なお芯は鉄で，その上を銅で覆っており，その上に箔を張ったものと考えられる。

3は銅地金張りであるが，金箔は僅かしか残存していない。径2.9cmを測り，断面はやや偏平な円形を呈する。

4は径2.5cmとやや小形で，銅地金張りである。断面は円形を呈する。

5も銹化が著しく僅かに金箔が残っている。径3cmを測り，断面はやや偏平な円形を呈す。

6は銅地金張りで，径2.9cmを測る。金箔は僅かに残存する。断面は偏平な円形を呈す。

玉　類　(第13図　8～17)

勾玉　(8～12)

8から11は赤瑪瑙製で，コの字形を呈する。頭部の穿孔はすべて一方向からである。8は長さ3.7cm，幅2.1cm，厚さ1cmを測る。9は長さ2.5cm，幅1.4cm，厚さ8mmを測る。10は長さ3.1cm，幅1.8cm，厚さ8mmを測る。11は長さ3.4cm，幅2.2cm，厚さ1cmを測る。

12は頭部の破片で水晶製である。穿孔は一方向からである。厚さは8mmを測る。

切子玉　(13～15)

いずれも水晶製で6面体をなし，穿孔は一方向である。13は長さ2cm，最大径1.3cmを測る。14は長さ1.8cm，最大径1.2cmを測る。15は長さ2.3cm，最大径1.6cmを測る。

管玉　(16，17)

16は淡灰緑色を呈する緑色凝灰岩製で，いくぶん銅張り状を呈している。穿孔は一方向で，長さ2.3cm，径1.3cmを測る。

17は濃緑色を呈する碧玉製で，穿孔は一方向からである。長さ2.9cm，径1.1cmを測る。

第Ⅴ章　結　　語

古墳の年代

古墳の築造年代については副葬品，特に須恵器の編年による年代観が最もよいが，本古墳の石室内に残されたものは僅かであった。これ以外にも追葬時に石室外へ掻き出されたと考えられるものが，南東墳端で出土しているが，これとてその多くは流失したものと考えられる。したがって年代についても十分な検討はなし得ないが，ここではおおよその年代を示しておく。

さて須恵器のうち，編年の整備されている杯について見てみよう。杯は１が寒風１号窯のＡ類より口径が大きく，あまずつ式に近い様相を呈しており，３から５は寒風Ａ類にやや先行，２と６は寒風Ａ類，７は寒風Ｃ類に類似する。また本墳から３kmほど南西に所在する二子御堂奥古窯址の資料では，２と６がⅠ期，７がⅡ期と考えられる。したがって寒風Ａ類や二子Ⅰ期が多少の幅はあるが，７世紀初頭から７世紀中葉に求められていることを考えれば，それ以前，概ね６世紀の後半に築造年代が推定される。その後追葬が何回か行われているが，石室内から杯蓋の扁平なつまみの断片が出土していることから７世紀の後半まで続いたものと考えられる。

古墳の被葬者

古墳は南北16.5m 東西13m の円墳で，内部に全長６ｍの横穴式石室を有する。規模としてはこの地域では普通である。周辺には同時期の古墳が認められず，尾根上に独立して構築されている。しかし尾根筋の中心には築造せず，東側に偏し，また墓道も南東斜面に向って下ることなどから，丘陵東側山裾部の黒住地区に認められる古墳時代後期の集落との関係を一層強く感じさせるものである。

さて石室内には築造後何回かの追葬が行われており，事実須恵器の年代観からも100年間に至る使用が確認されている。その回数については明らかにし得ないが，最低の埋葬者数は副葬品から推定される。このうち耳環は本来２個一対で着装されるものであり，したがって７個の耳環では４人となり，それに盗掘，あるいは流失，さらには耳環を着装しない被葬者の存在等を考慮すれば４人以上と推定される。

以上の被葬者の性格については，残存する副葬品が僅かなことから十分な検討はなし得ないが，墓道から鉄滓が出土したことは注目される。鉄滓を副葬する古墳は美作に多いが，本地域にも若干認められ，近くではこうもり塚古墳から出土している。この地域で製鉄関係の遺跡が明らかでない現状では何とも言えないが，鉄製産に関わる集団であった可能性が強い。

1．古墳の遠景（南東から）

2．調査前の古墳（南から）

図版 2

1. 調 査 風 景

2. 調 査 風 景

1．石室内副葬品出土状態（南から）

2．敷石部の副葬品出土状態（西から）

図版 4

1．副葬品取り上げ後の石室（南から）

2．敷石下の排水溝状の遺構（南から）

1．閉塞石の状態（南から）

2．玄室から入口の見通し（北から）

図版 6

鉄滓の出土状態（南から）

1．墓道（北から）

2．墓道と石室（南から）

1．石室の掘方（北から）

2．Nトレンチの土層（南西から）

1．北側の周溝（北から）

2．西側の周溝（南から）

1．古墳全景（南から）

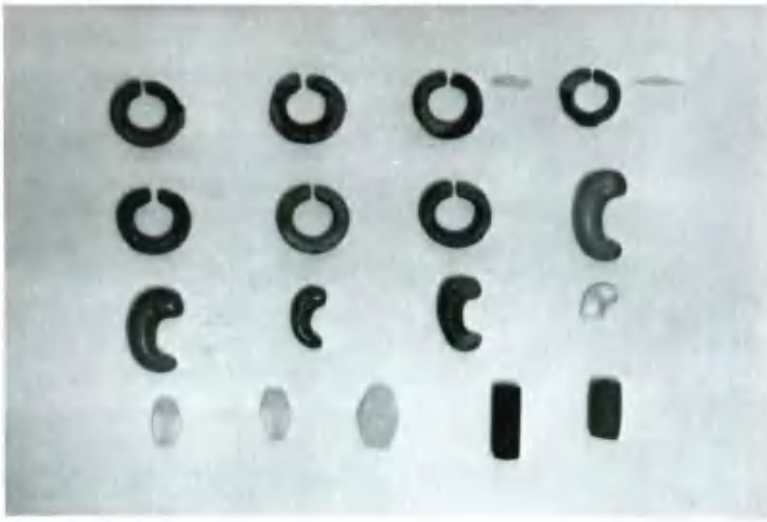
2．古墳全景（北から）

須　恵　器(1)

須　恵　器(2)

1. 須　恵　器(3)

2. 鉄　製　品



1. 装　飾　品

2. 鉄　　滓

岡山県埋蔵文化財発掘調査報告　50

高　坪　古　墳

1982年 3 月 27 日　印刷

1982年 3 月 31 日　発行

編集
発行　岡山県教育委員会

岡山市内山下２－４－６